

産業保健における 可能性の追求をテーマに 第86回学会開催

日本産業衛生学会

第86回日本産業衛生学会が5月14日から17日まで、愛媛県松山市で開催された。今大会のテーマは「産業保健における可能性の追求」。同テーマでのメインシンポジウムでは、メンタルヘルスや人材育成、産業保健関連法制度、国の施策など、幅広い観点から現状の産業保健の課題や今後の方向性等について講演が行われた。

企業共催のランチョンセミナーでも、「可能性の追求」がひとつのテーマになっており、メンタルヘルスや睡眠障害の改善をサポートする新しいツールの可能性が取り上げられていた。スマートメディカル(株)共催のセミナー「音声解析スマートフォンで探る情動・睡眠動態」では、笑い与健康に関する研究の第一人者である福島県立医科大学教授の大平哲也氏による講演「笑い、音声研究の展望」、今学会長を務めた愛媛大学大学院教授の谷川武氏による講演「経耳

道光照射が睡眠障害・抑うつ気分

に及ぼす影響に関する研究」が行われた。
大平氏は、これまで研究で確認されてきた笑いの健康効果について紹介。大平氏が行った研究結果では、人生を楽しんでいる人に対して、楽しんでいない人の循環器疾患死亡の危険度は、虚血性心疾患1.9倍、脳卒中1.8倍だったことを示し、笑うという行動や、楽しいと思うことが健康に重要であることを指摘した。そして、新しいツールとして、東京大学とスマートメディカル(株)等が開発した音声で気分を解析するシステム「こころコンパス」の活用の可能性を指摘。これは音声で気分の浮き沈みを高精度で評価できるもので、ハッピーポイントが示されるようになっていく。大平氏は、「毎日、楽しいことを見つけよう」と意識すること、またその行動によって、ポジティブな気持ちの維持に働くのではないかと述べた。

また、谷川氏は、フィンランドで季節性うつ病の治療効果のある医療機器として使用されている耳から光を当てる機器「Valkee」について、臨床研究を行った結果を紹介した。谷川氏は、IT企業社員で抑うつのある27人を対象に、1

日12分、機器で耳から光を当てる群と何もしない群に分けて、4週間後の抑うつや睡眠、気分状態を比較した。その結果、耳から光を当てた群は抑うつや睡眠の状態の改善等がみられていた。谷川氏は、睡眠検査での客観的な評価の必要性等の課題を指摘したうえで、「こうした新たなテクノロジーを試して、よい効果が得られるのであれば、閉塞感のある現場の状況を打破し、産業保健におけるメンタルヘルスの向上に寄与できるのではないかと述べた。

ポスター発表では、デンソー健康保険組合・保健師の畑中陽子さんが行った、同健康組合に継続的に加入している約2万人について、喫煙状況別に20年後の医療費を分析した研究が優秀ポスター賞を受賞した。分析の結果、総医療費、循環器疾患、糖尿病、整形外科、がん、歯科にかかる1人当たり平均医療費は、がんを除いて「10年間21本以上継続喫煙した群」で最も高く、総医療費と循環器疾患にかかる医療費は、加齢による増加以上に喫煙状況が強く影響していたことが明らかになった。今後、このような健診データとレセプトデータの分析と保健事業への一層の活用が期待される。

保健師の 積極的活用等について 要望書を提出

日本産業保健師会

日本産業保健師会は6月17日、厚生労働省が現在、小規模事業場の産業保健活動の支援体制の見直しを進めていることを踏まえて、同省労働基準局長宛てに、「小規模事業場への支援体制の強化と保健師の積極的な活用」と「産業保健における保健師の現任教育体制整備のための予算措置」を求める要望書を提出した。

小規模事業場では全般的に労働衛生活動が遅れており、早急に体制の強化が必要であり、衛生管理者としての役割も期待される医療職である保健師を積極的に活用していくべきとして、産業保健活動支援のための体制に保健師を配置することを強く要望している。一方で、産業保健師は一人職場も多く、研修機会が少ない現状があることから、保健師がより効果的な健康施策に取り組めるよう、現任教育体制の強化のための予算措置を要望している。

へるすあっぷ 21 9月号表紙



本文記事 : 28ページ~29ページ ▶